

聖書箇所：ルカの福音書 3章 15～20節

説教題：キリストはどなたですか

1 ヨハネはキリストだろうか

(1) ローマ帝国の支配

およそ二千年前、洗礼者ヨハネがイスラエルのヨルダン川のほとりに現れました。彼はこんなことを語りました。「まむしのすえたち」「悔い改めにふさわしい実を結びなさい。」「斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火の中に投げ込まれます。」

非常に厳しいことばです。今の時代、教会へ来た人たちにこんなことばを語ったら、おそらく次の週にはだれも来なくなるでしょう。しかしこのときヨハネのことばを聞いた人たちは、そんな厳しいことばは聞きたくないと言って去るのではなく、むしろ反対にヨハネに対しておおきな期待を寄せていくようになりました。

15節に「民衆は救い主を待ち望んでおり、みな心の中で、ヨハネについて、もしかするとこの方がキリストではあるまいか、と考えていた」とあります。前回も申しましたが、当時イスラエルはローマ帝国の支配下がありました。自分の国ではなく、外国であるローマのために税金を納めなければならないという屈辱を味わっています。おもだった街にはローマ軍が駐留し、横柄な態度でにらみをきかせていました。自分の国であるのに、ローマ兵の顔色をうかがいながら生活しなければならない有様です。イスラエルは、自分たちの先祖アブラハムを通して与えられた約束の地のはずでした。この国は乳と蜜の

流れる神の恵みの地でなければならなかったのです。それが今はこんな状態。神の約束はどうなったのか。神はこの国をお救いにならないのか。いや、必ず神はイスラエルを救ってくださるに違いない。

心の中に不満が鬱積すればするほど、かえって救い主を待ち望む機運が高まってきました。

そんな時にヨハネが現れました。確かに厳しいことを語りはするけれど、よく聞けばまっとうなことを言っています。間違ったことを見れば、たとえ相手が政治的な高い地位にある権力者であろうが手加減しません。容赦なく相手の罪を指摘し、齒に衣を着せるようなことはありません。

(2) 国主ヘロデのスキャンダル

今も昔も人々は政治家のスキャンダルには敏感です。今日の箇所には、国主ヘロデのことが出て来ます。彼はもともと兄弟の妻であったヘロデヤを、強引に自分の妻としていました。今の時代のことばで言えば、二重結婚ということになります。聖書でももちろん禁止されていました。ヘロデはユダヤ人ですから聖書を知らないはずはありません。律法に反していることは承知しています。知っていながら、どうしようとやるような確信犯ですから悪質です。

今も昔も、程度の差はあるけれど政治的な指導者は道徳的にも潔白な人であるべきだという不文律があります。もし指導者自ら律

法を守ろうとしないなら、人々の心は荒れていきます。人々はヘロデのしていることを見て、この国の将来を心配しました。何とかしなければと思いました。けれども、だれも怖くてヘロデにももの申すことができません。そんなとき、ヨハネが堂々とヘロデの間違いを指摘したのです。人々は胸につつかえていたものが降りたような気がしました。同時に、言いにくいことをまっすぐに語ってくれたヨハネに対する人気も高まって参ります。この方はもしかするとキリストではあるまいか。そんな噂をする者たちも現れました。

## 2 ヨハネよりも優れた方が来られる

### (1) 水によるバプテスマ

洗礼者ヨハネが遣わされてきた目的は、イザヤ書の中ですでに説明されています。「主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。」言い換えれば、やがて来られる救い主キリストを指し示すために、ヨハネが遣わされたのです。ですから、ヨハネこそキリストではないかと噂が立つことはヨハネの本意ではありません。だからこう言います。16節。「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりもさらに力のある方がおいでになります。私などは、その方のくつのひもを解く値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。」

人々はヨハネの声に従い、ヨルダン川に向かい、罪を告白し、水でバプテスマを受けました。それは旧約の律法にも書かれていたことでした。「汚れた者は、水で罪のからだをきよめ、きよくならなければならない。」

罪というものは目に見えるわけではありません。目には見えないけれど、不思議なこ

とにからだの感覚として感じることができます。日本語にもいくつかの表現があります。たとえば、「手を汚す」ということばがあります。人に隠れて、法律に反することや道徳的に認められない反社会的な行いをすることを言います。

あるいは「足を洗う」ということばもあります。こちらは長年がんばってやってきた仕事から引退するという意味でも使いますが、あまり人に言えないような汚い仕事を辞めて、まっとうな職業に就くことを意味します。いずれも罪を犯せば手や足が汚れるという感覚が日本人にもあるのです。

聖書でも同じです。目には見えないけれども罪は私たちのからだにしみついている。だから水でからだを洗ってきよくならなければならない。しかしだれでもわかることですが、水でからだを洗ったからと言って罪からきよめられることはありません。もし本当にそんなことができるのなら、だれも悩みません。水でからだを洗っても、罪の意識は残ります。正直な方ほど、罪を思い起こして苦しみます。水でからだを洗っても罪からきよめられない自分であることに気がつきます。

### (2) 聖霊と火とのバプテスマ

ヨハネは水でバプテスマを授けました。今見たとおりに水によっては完全にきよくすることはできません。いや、むしろますます罪の意識が募るばかりです。それなのにどうしてヨハネは水でバプテスマを授けるのでしょうか。

理由はただ一つです。ヨハネが遣わされてきたのは、やがて来られる優れた方、主イエス・キリストの道を備えるためだと言いました。ヨハネは、人々をイエス・キリストに導

くためにこのようなことをしているのです。水でからだを洗っても罪は消えない。だからこそ、私たちは完全に罪から救ってくださる方の所に行かなければならない。その方は、ヨハネよりも優れた方であり、聖霊と火とのバプテスマを授けてくださる。私たちはその方の所に行って罪をきよめていただかなければならない。

### 3 聖霊と火とのバプテスマを授ける

#### (1) 手に箕を持って

ではこの、「聖霊と火とのバプテスマ」とは何を指すのかとが次の問題となります。17節でヨハネはこんな説明をしています。「また手に箕を持って脱穀場をことごとくきよめ、麦を倉に納め、穀を消えない火で焼き尽くされます。」

この17節を読んで、いったい何を言っているのかすぐに理解できない方もおられると思います。まず、使われている言葉が難しい。それに農作業のことを言っている事だとはわかるけれど、見たこともないし、実際にやったこともないので何をしているのかわかりにくい。そもそも、いったいヨハネはここで何を言いたのか。

まずわからないことばは「箕」という単語です。最近では便利になりましたので、辞書を引くよりもネットで検索すると写真付きで意味を調べることができます。私の生まれ育った家は農家でしたので、私も実際にこれを使ったことがあります。箕という道具に収穫した麦を入れます。少し空中に放り上げるようにします。ゴミや穀は風で飛ばされ、麦の実だけ残ります。必要なものと必要でないものを選別するために使う道具です。収穫した麦は倉に納めます。残ったもみ穀はいらな

いものです。いらぬものは火をつけて燃やしてしまいます。

#### (2) きよめる

ヨハネが言おうとしていることは二つです。一つ目は、やがて来られる方は私たちをきよめてくださるということ。どのようにしてか。この方が私たちに聖霊を送ってくださることによってです。どのようにして聖霊が遣わされてきたのか。ヨハネの福音書16章7節にこうあります。「わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助主をあなたがたのところへ遣わします。」

助け主とは、聖霊のことを指します。主イエスが去って行くことにより聖霊が遣わされてきました。もっと具体的に言えば、主イエスが十字架で死んでくださったがゆえにということです。

私たちはこの方の十字架によってきよくされ、その印として今聖霊をいただいております。聖霊をいただいていると言っても、実感が無いという方が沢山おられます。自分には良くない人間だから聖霊がいらっしやらないのではと、悩む方もおります。安心していただきたいと思えます。聖霊の存在は感覚によってわかることはほとんどありません。ただこの方がなされた結果によって知ることができます。例えば一つだけ挙げましょう。皆さん、なぜ今日礼拝に来られたのでしょうか。義務だからですか。もしそうならなぜ毎週来るのですか。ただ義務だけなら続くはずはありません。暇つぶしに来たのですか。それなら、他にももしろいことが見つければもう来ることはないはずで。皆さんがこの場

に来て、ここに座っている。考えてみれば不思議なことです。すべてが聖霊のみわざです。

念のため誤解のないように申し添えますが、礼拝に来なかったから聖霊が働いていないということではありません。礼拝に来なくても、聖霊は十分に働いておられますので、これから礼拝を休むことがあっても、安心して休んでいただきたいと思います。

### (3) 火で焼き尽くす

イエスは聖霊を送ってくださって、私たちをきよくして下さる。それがヨハネの言おうとしていた一つ目のことです。二つ目ですが、この方は火で殻を焼き尽くされるということです。イエスは再び私たちのところに來られます。そのとき世の罪をさばくと言われていきます。それがこのことです。9節で「良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます」とありました。麦の実は大切に倉に納められ、残った殻は不要なものですから火で焼かれます。これを聞くと不安になる方がいます。「私は役に立たない殻のほうなので、もしかして火で焼かれてしまうのだろうか。」

私が何度言っても、なお不安を覚える方がおられますので、今日も繰り返します。神はいったいどのような方なのでしょう。私たちがちょっとでも役立たずだとわかれば、即座に火に投げ込もうと隙を狙っている、そんな方なのでしょう。もし本当にそのような方なら、とっくの昔に私たちは火に投げ込まれて、焼かれて滅ぼされておしまいになっていたはずで

す。神は決してそのような方ではない。もし火で焼くことばかりを考えておられるのなら、どうして、神のひとり子であるキリストが私

たちの所に遣わされてきたのですか。どうして、この方が私たちの罪を背負って十字架で死ななければならなかったのですか。どうして、聖霊を私たちのところに送らなければと考えて下さるのですか。どうして、さばきの日は先延ばしにされているのですか。理由は一つだけです。私たちが滅びることは望んでいない。いやむしろ神は私たちが救いたいと願っているのです。天の御国に、良い人でも悪い人でもとにかく詰め込むだけ詰め込みたい。そんなふうには思っていない。そんな方です。

「私は役に立たないから」と言う必要はありません。そんなことを言うのなら、全員神に罪を犯した役立たずですから。「でも、あの人は神のご用に用いられているけれど、私はそうではない」と言いますか。

何度も言います。行いで比べる必要はありません。神は、私たちの行いで救うとか、火に投げ込むとかを決める方ではありません。

私は救われていないかも知れないと嘆く方がおります。私は罪深い人間だからと悲しそうに言われる方もおります。神はどのような方でしょう。私たちのうちにある悲しみを見逃す方では決してありません。ふさわしくないとと思う者こそ主の救いの近くあることを、覚えていただきたいと願われます。